
ドクター・ピンク

三野大貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドクター・ピンク

【ISBN】

N74230

【作者名】

三野大貴

【あらすじ】

ある卑屈でひねくれものの医者はある理由から心霊スポットとして有名な火人島へ移住する。そこで出会つたやたら空気の読めない一人の子供。

ほかにもその島にはやたら変な奴ばかり住んでいて・・・
時々シリアルスな基本ギャグストーリーです

プロローグ

「幸運はそれが失われるまでは知られない」

セルバンテスという小説家がドン・キホーテという話に書いたセリフだ

最初聞いたときはそんなことはないと思っていたがまさにその通りだった

あの「幸せではないが不幸じゃない」と思っていた日々がいかに幸せだったか

「いつも隣にいた奴がいなくなるわけがない」

甘い幻想だ

気付くのは全て無くしてからだ

あの島へ行くまで俺は今が一番不幸だと思っていた
だが違った

あの島に住むイカれた奴ら

あいつらのせいで俺の人生はもつと不幸になつた

プロローグ（後書き）

初めて投稿する小説です。
色々つたない部分もあると思いますが、どうかよろしくお願いします。
感想も書いてくれると嬉しいです。

第1話 心靈スポットは基本何も起ららない

「火人島」

ひびとじま と読むらしい。

瀬戸内海の小島だが、東京では有名な心靈スポットだ。

昔大きな火事があつて島全体が燃え島民全員が犠牲になつたとか、一家惨殺事件があつたとか。

それだけならよくある話かもしれないが、「入った人が一人も帰つてこない」とか「住民が武器を持つて襲つてくる」など、もはや都市伝説のようなものさえある。

しかし離島であるため心靈スポットだが肝試しのよつな」とはほとんど無いらしい。

ようするに人口が少ない小島で、外から来る人もほとんどいない「人間嫌い」の人気が住みやすいといふだ。

外からの人の通りがほとんど無い「まさに孤島」。

その港に一つの小さな漁船が止まつた。

「・・・・・ 着いたよ」

全身黒づくめのやせている不気味な男が後ろで寝ていた男に話しかけた。

「ああ・・・

ありがとな 孤島というわりには思つたより近いんだな」

そういうと男は港に降りた。

辺りを見回すとそこには、看板とくたびれた木造の休憩所のようなものがあるだけでほかは何も無かつた。

看板には「ようこそ火人島へ」と書いているようだが・・・

「！」の看板怖すぎるだろ・・・

確かにその看板は明るい雰囲気を出そうとして動物や子供の絵が描かれているがせびついていてその絵がよけい不気味になっていた。

「なあ 僕は村長？ であつてんの？

とにかくこの島で一番偉い人に会いたいんだけどさ、ビコニいるか知らないか？」

男が振り向くとそこに漁船と黒づくめの男の姿は無かつた。いや、あるにはあるがもう海へ向かいとても小さくなつていた。

「ちよつ待つ」

思わず追いかけようと一歩を踏み出した。
しかしここは港だ。一步先はもちろん海。

「つおつー」

反射的に足を戻そとしたが、そんなうまくいくわけも無い。
そのままバランスを崩し海へ落ちていった。

幸い今日の天気は快晴で波もそんなに高くは無い。
自力で泳いで近くの砂浜にたどり着くことができた。

その砂浜は港と同じ何もない殺風景なものだった。

一つ救いがあるとすればあの無駄に不気味な看板が見当たらぬことだった。

「ぶはつ」

男は海から這い出て「うつ」と空を見上げて横になつた。
雲ひとつない青い空から太陽の光が降り注ぐ。
が、間違つてもいい氣分とはいえなかつた。

どこか楽しむことにためらいがあつた

「クソツ、気分わりい・・・・・・・

「なんで?」

「コツと横から頭を出され急にかけられた声にビクツとなりがばつ
と頭を持ち上げた。

思いつきつぶつかると思ったが、すつと頭をよけられた。

「アハハッ びしょぬれで何やつてるのおじさん」

「アア?」

そこにいたのは小学生低学年ぐらいの子供だった。

服装と顔つきからしてたぶん女の子だろう。

薄茶色の髪で、それが顔の左側を耳の辺りまで覆い隠していた。

「なんだお前

「んーおじさんこそこそ見ない顔だけど?

もしかして観光客?」

口調からすればおそらくこの島の住人だと思つ。しかし男はそんなことはどうでもよかつた。

「おいガキ』『おにーさん』はまだ20代だおじさんはやめる」

男が立ち上がりながら机の上に机は一ヶと笑つた

「私は鎧塚叶つてこの家の

『おにーさん』は?」

「ヨロイヅカキヨウつて……
ガキのくせにえらいべ」つい名前だなオイ」

「いや年齢は関係ないんぢやない

それでおじさん、おにーさんの名前は?」

「おい今おじさんって言いかけた!」

あからさまにいらだちながら男はにらみつけた。

だが、そんなことはまったく気にせず叶は名前を聞き続ける。

「いや 言つてないよ

あつ名前教えてくれれば名前で呼ぶからか
教えてよ」

「もつとこやだ

俺はな、自分の名前が嫌いなんだ」

「へえ

変わってるね なんて名前なの？」

「人の話聞いてんのか！」

チツ、と舌打ちして周りを見回した。
コイツ以外に人がいる感じはしない。
というか本当に何もない。
ちかくに「海の家」があつたが今は3月だ。
おそらく誰もいないだろう。

「あー、キョウだつたけ

俺は村長？であつてんの？

とりあえずこの島で一番偉い人に会いたいんだけどさ、どこにいる
か分かる？」

「何で村長に会いたいの？」

「ああ村長であつてたのね

おれはな、この島に引っ越すんだよ」

その瞬間、周りの空気が止まった。

しばらくの沈黙の後、キョウが男の手を握つて満面の笑みで喋りだ
した。

「ようこそ火人島へ！！

引っ越ししてきた人なんてすゞく久しぶりだ！！

これから仲良くお願ひねおじさつおじさん…！」

「何でおじさんって言い切つた！？」

何で一回言い直しておじさんって言い切つたんだ！！
言い直した意味ねーだろーー！」

大声で怒鳴りつけたがキヨウはまったくひるむ様子もない。

「それでおじさんの名前は？」

「教えねーっつてんだろ」

「じゃあ村長がどこにいるか教えない」

「つなー！」

予想していなかつた反撃に男のが固まつた。
自分ひとりで行こうとも考えたがこの島は結構広い。
一人だけでは確実に迷つてしまつ。
安全に行動するためにはこいつに名前を教えなればならない。

「お・・・俺の名前は・・・
いついや、これだけは！
しかし・・・・・・」

「なんで究極の選択みたいになつてるの」

他人から見れば実にくだらない葛藤だったが本人にとつては身を切
るような思いだつた。

死ぬほどくだらないが彼はこの葛藤に30分近く費やした。
で30分後・・・

「 もういいから言つちゃ こなよ
樂になるよ」

「 くつ・・・・・・・・

分かつた、言おひ」

男はやつと観念して大きく息を吸い込み自分の名前を言い出した。

「 おひ俺の名前は・・・・・・ 桃色春太郎だ」

「 ブツ」

キヨウは思わず吹き出した。

「 てめえ 笑うんじゃねーよー！
てめえが言わせたんだろ「 がー！」

「 アハハ 『めん』『めん』

春太郎が息を切らせて大声を出した

「 はあはあ もういい

名前教えたんだから案内してもらおうか」

「 もうだよ」

キヨウが指差したのは「海の家」だった。
周りの空気が凍りついた。

「 ・・・・・・てめえ バカにしてんのか？」

「嘘じゃないよ」

そういうとキヨウは小走りで海の家まで走つていった。

「おーい そんちょー」

「そこにあるわけねーだろ」

桃色が追いついてつぶやいたときだった。

「ハーサイ 読んだかい！！」

そういうテンションの高い声が聞こえると海の家の奥から一人の壮年の中年が現れた。

その男は何とも説明しづらかった。

まず男の風体だが、真っ白なスーツ、金髪オールバック、そして胸ポケットには赤いバラが一輪さされている。

そしてなぜか柴犬を連れている。

そんな格好の男が3月の海の家から現れたのだ。
桃色は言葉を失つた。

「おやキヨウかい
なにか用かね？」

「この桃色春太郎つて人が村長に用事だつて」

「ああ君が桃色くんかい？」

話は聞いているよ、入つてくれたまえ」

「・・・・・ハイ」

冷静な判断力を失っていたのか、桃色はツッコむこともせず海の家に入つていった。

第1話 心靈スポットは基本何も起じらない（後書き）

なんかグダグダですみません

一段落したらキャラクターの設定でも入れようと思います。
感想も書いてくれたらうれしいです。

あつ、あと瀬戸内海に火人島はありません。

第2話 計画は思つたりよひに進まないよひに進む

海の家の中は思つたより普通だつた。変なおつさんのが住んでる割には普通だな、といつのが桃色の感想だつたが実際に口には出せなかつた。

「とりあえず紅茶でもいれよう
ここで待つていてくれたまえ」

「ああ ありが・・・」

その部屋のドアが開かれたとき桃色は言葉を失つた。

その部屋は海の家からほんまつたく想像できない部屋だつた。
まず、驚くほど広かつた。

床に絨毯が引かれている。シャンデリアがある。
ヨーロッパの貴族の部屋を思い浮かべてくれれば大体間違はない。

「ビーなつてんだコレ!-?」

「私の趣味でね

こんな雰囲気の部屋が好きなんだ」

「だからつてやりすぎだろ!」

「一かじやあなんで海の家に住んでんだよーーー」

「私の趣味でね

海の家が好きなんだ」

「どんな趣味！？」

まあ落ち着いてとなだめられ、ソファに案内された。村長の格好は、海の家から出てきたときは異常な服装に見えたが、この部屋の中では驚くほど馴染んで見えた。

「あつ私お茶よりジュースがいいな」

「お前まだいたの」

隣に座つたのはキョウだつた。

いつのまにか、といふか当たり前の顔をして座り込んでいた。

「ああキョウ済まないがシルヴァ・ムーレスト・ランガードを小屋につないできてくれないか」

「なにその中一ぐせー名前？
その柴犬の名前なの？」

「分かつた
おいでシムラ」

「犬の名前勝手に略してんじゃねーよ」

キョウがシムラをつれて外へ出て行つたあとで、と村長が机をはさんだソファに座つた。

桃色の前に紅茶が出された。

「君がこの島に引っ越してくる桃色くんだね

私は村長の大谷だ」

「はあ、ジーもな村長さん」

何のやる気も感じられない氣だるげな声だった。

「村長とは呼ばなくていよいよ
堅苦しくて好きじゃないんだ

気軽に【ダンディーな紳士】と呼んでくれてもかうひつだ」

「こや呼ばねえよ

なんで気軽なほうが字数がはるかに多くなってんだよ」

出された紅茶に砂糖を入れながら桃色がつゝこんだ。

「それにしてもこんな心靈スポットとして有名などこか引っこ抜く
てくるなんて変わってるね
」「つこつのが好きなのかい？」

村長が紅茶を飲みながら話しかけてきた。
が、熱かったのか自分で作って口に合わなかつたのか、一口飲んで
すぐにおいてしまつた。

「いや、できるだけ人と関わらなくてすむところに行きたかったんだ
場所は人が少なけりやどこでもいいんだよ」

「え？

今あなたはダンディーって言つたかい？」

「言つてねえよー」

「冗談だよ」

ハハハと笑いながら、村長はゆっくりとたたかがつた。

「そろそろキヨウも帰つてくると思ひしね

茶菓子を用意しようか」

「私チヨコレートがいい！」

村長が立ち上ると同時にドアを開けてキヨウが小走りで入つてきた。

おじやましまーすと小さく言ひと桃色の隣に座つた。

「なあ、茶菓子はいいから案内してくんない
俺もう家に行きたいんだけど」

「ははつダンティードギツトスマナ」

「言つてねえよ

つーかお前ちつさの聞き間違い[冗談じやなかつたな]

キヨウのリクエストどおりチヨコレートが二人の前に出された。
何かアルファベットで書かれておりどいかの国の高級品であるう事が予想される。

村長は向かいのソファに座り、話をはじめた。

「では話を再開しようか」

「再開つて始まつてもいいねーだろ」

「ははつダンディーすきじめんなさい」

「いや言つてねえつつてんだろ……。」

チヨコレートをほおばりながらキヨウが横から口を挟んできた。

「村長いい人だけじまともに話したらすぐ疲れるよ?
用があるならどうあえず私に話してみなよピンク」

一瞬なにを言われたか分からなかつたが、落ち着いて聞き返した。

「おいガキ、ピンクって誰のことだ?」

「モチロンおじさんだよ!」

おじさん名前嫌いつていつてたから「シクネーム考えたの!」

桃色イコールピンクといつ年相応の単純な「シクネーム」だ。
が、桃色がそんな簡単に納得できるわけがない。

「お前さあ『おにーちゃん』にむかつて、ピンクはないんじゃないの」

「えー可愛じよ?」

「だから嫌なんだよ!」

子供相手に本気になるのは大人気ないと本人も思つていたが、これ
だけは譲れなかつた。

二人がギャーギャーと言い合つ横でチヨコレートを食べ終えた村長
が、

「では家まで案内しましょう
着いてきてください」

といい立ち上がりた。

「ああ やつと案内してくれんのね」

「えつダン・・・」

「ダンディーは言つてねえ」

私のチヨコーネーと叫ぶキヨウの声が聞こえたが無視した

第2話 計画は思つように進まないよひであります（後書き）

予想以上に長くなつたのでまたここで切れます。
グダグダですいません。

感想お願いします。

人物紹介はもう少し後になるようです。

第3話 久しぶりに家に帰ると他人の家のよつな気がする

「荷物はもう届いてると思つよ」

村長の言ひとおり家にはいくつかのダンボールが積み重ねられていた。

ここからは海は見えないが、海の家からは徒歩20分ほどで着いた。最初見たときは広いと思ったがそのほとんどは山のため人が住んでいるところは少ないらしい。

ちなみにキョウは来ていない。

村長がかわりのチョコレートを出してやつたため海の家に残つた。桃色の家は民家の集まつた村のよつなかからは少しはなれたところにあつた。

普通より少し大きいぐらいの木造で和風の家だ。
庭もあるが手入れがまつたくされていなかつたのか草木が生い茂つてゐる。

「思つたよりひでえな・・・」

「ははつ大丈夫
家の中はちゃんと手入れしてある
私がコーディネートしているから安心してくれたまえ」

数秒沈黙が辺りを包んだ。

その後、桃色は一気に走り出し家の玄関へ向かつた。

ガラツと勢いよく玄関を開けた。
その中は予想通りになつていた。

まず、木造の住宅にシャンテリア、ヨーロピアンなカーペット。
そして赤いバラが花瓶に飾られていた。
壁にはいくつかの絵が飾られている。
海の家よりグレードが高かそうだつた。

「・・・なにしてくれてんだ」

「私なりの歓迎式」

「いらねーんだよー！」

なんで空き家を勝手にリフォームしてんだ！
つーかこんな和風の家をよく洋風にしようと思つたなーーー！」

「私の趣味でね

不可能を可能に変えるのが楽しいんだ」

「可能になつてねえんだよーーー！」

今すぐ戻してくれーーー！」

「それは無理

お金がないからね」

まったく悪びれずに村長が言い切つた。

そういうやキョウもこいつと話したりすゞく疲れるつて言つてたな。
それを思い出して桃色は言つた。

「やつ、もういいから

出て行つてくれ

後は自分でなんとかするからさ」

「えつ、d andahi?」

「言つてねえしスペル間違えてんじゃねーかー！
出て行けつってんだよーー！」

一人で大丈夫かいという村長を無理やり追い出し、片づけをはじめた。

「もう絨毯はこのままでいいな
とりあえずの問題はこれなんだよな・・・」

桃色が見上げたのは天井にぶら下がっているシャンデリアだった。
やたら大きく、もし落ちたら大怪我をしそうだつた。
なによりこれをどう処理すればいいのか分からぬ。

「普通に電灯処理する感じでいいのか？
とりあえずバラして庭に置いとくか・・・」

シャンデリアは解体して庭においておくことにした。
その内燃えないゴミとして出すつもりだ。

後の片付けは比較的スムーズに行えた。

スムーズといつても2時間近くかかったのだが。

壁に掛かっていた絵は重ねてダンボールに入れだし、バラは捨てて花瓶はもともとあつた場所においておいた。
ほかにも奇妙なところはいくつもあつたが、気にならない程度になつたのでもう放つておくことにした。

「さて、あとは俺の荷物だな」

「ねえねえ

ピンクつて医者なの？」

後ろから聞いた子供の声。

ぱつと振り向くとそこにはキョウがいた。

荷物をひっくり返してその中の医療の専門書を見ている。

「てめえ何でここにいんだ！？」

「一かどこから入りやがった！？」

「窓かつ、普通に玄関から入ったよ」

「今明らかに窓って言い切つたろ！」

「荷物ひっくり返してんじゃねえよ！」

「返せっ！..」

キョウの手から本を取り上げるとダンボールになげられた。

そのあと散乱している本を集めてダンボールに無造作に詰め込んでいる。

「本棚あるのにダンボールに入れるの？」

「そんな無理やり入れたら本が傷んじゃうよ」

そういうながらキョウは新しいダンボールをひっくり返した。ダンボールの中から荷物がドバッと流れ出る。

「ひっくり返すな！！

てめえ人の話し全然聞いてねえな！！

いい加減にしろよ、もう3話目なんだよ！

本当はこの話1話の予定だつたんだぞ！！

てめえらが予想以上に人の話し聞かねえから全然話が進まなんだよ
！！」

桃色がぶつちやけた裏話をするとキヨウは聞く耳を持たず、荷物を物色しはじめた。

その荷物は小物が多く入っていた。

筆箱やスリッパ、何かのケース。

いろいろなものが無造作に詰め込まれていたらしい。

「なんだろコレ？」

その中からキヨウが手に取ったのは写真立だった。

茶色くいくつか貝殻がつけられている。

といふどじゅう色がはげており、おそらく手作りだろう。

その中には、中学生ぐらいの少女の写真が入っていた。

「ねえコレだ『出て行け！』

キヨウが言い終わる前に、桃色がこれまで一番の大声で怒鳴った。

キヨウがびくつとなり写真立をその場に落とした。

桃色がその写真立を拾い本と同じダンボールの中に放り込んだ。

「いい加減にしろよクソガキ

俺は誰にも会いたくねえんだ

それだけじゃなく思い出したくないことまで引っ搔き回しあがつて今すぐ出て行け」

「・・・・・

キヨウは泣きそうな顔をしていたがなかずに何も言わず、家から出て行つた。

もう太陽は西に傾いていた。

第3話 久しぶりに家に帰ると他人の家のよつな気がする（後書き）

桃色の言つとおりこの辺は第1話の一 部の予定でした。

第1話はまだ続きます。

もう第3話だけね。

第1話が終わつたらキャラクター紹介を入れよつと思ひます。
グダグダやつてすいません。

あつあとダンディーのスペルはd a n d yです。

第4話 後悔先に立たず

桃色の家の前に白スーツの男・・・村長の姿があつた。

今は午後の6時。

そろそろ片付けは終わつた頃だと思い、差し入れを持つてきたのだ。

「やあ、片付けはすん…うおつーー？」

玄関をあけて入つたが、その家にはやたらドス黒いオーラのようなものが立ち込めていた。

思わず差し入れのチョコレートを地面に落とした。

「も・・・桃色クーン?
どこにいるんだい?」

村長が恐る恐る声をかけると、奥の部屋からガターンと物音がした。その部屋は物が散乱しておりまったく片づけが進んでいなかつた。よく見ると、段ボール箱の一つに人が入つてゐる。まあ、確實に桃色なのだが。

「どう、どうしたんだい！？

まるで・・・まるで・・・ダメだ、いい感じに例えられない！
とにかく一体何があつたんだい！？」

「自分の大人げの無さを反省してゐるんです・・・」

「は？」

「子供相手にムキになつた自分が恥ずかしい・・・」

もうだめだ・・・」のまま死にます・・・

「そんなことはどうでもいいんだ！！

それよりシャンデリアがなくなってるじゃないか！！
一体何があつたんだい！？」

「人が死ぬつつてんのにシャンデリア？」

イラッとしたが大声でつっこむ気力は無かつた。

「本当に元気が無いな・・・
とりあえずこのバラをあげよう
だから元気を出して」

「いりません」

そういうて出されたバラを手で払い、再び段ボール箱のふたを閉めた。

村長は諦めたのか立ち上がって、チョコレートの箱についている土を払いながらしゃべった。

「ところでキョウは来ていないのかい？

君に興味を持っていたようだから絶対いると思つてチョコレートを持つてきたんだが」

その瞬間、段ボール箱の中からあふれる黒いオーラがざつと濃くなつた。

「キ...キョウと何かあつたのかい？」

恐る恐る聞くと桃色はさつきの出来事を話し出した。
読者の皆様は3話の後半辺りを読みなおしていただきたい。

以下略

「・・・・・つーわけだよ」

しばらくの沈黙の後村長が口を動かした。

「なるほど・・・」

「うんスペルはあつてるね、じゃねーんだよ
マジでいい加減にしろよ

「冗談だよ
流石にね」

村長はハハハと笑うとまじめな顔になつてこう続けた。

「まあ、それは確かにキョウが悪いね
それで君はどうしたいんだい」

• • •

「やりたいことがあるならはつせりしたほうがいいよ
転ばぬ先の杖つて言うだろ」

「意味ちげーだろ！」

後悔先に立たずとか後の祭りとか・・・
まあそんなかんじのやつだろ」

桃色がイラついたようにつっこんだ。

段ボール箱から出で、ゆうべつと立ち上がった。

「・・・キョウがよく行くところ知ってるか？」

「そここの道をまっすぐ行つたところにある火人神社
あそこでよく遊んでいたな」

桃色は道を確認すると、一度背伸びしてまっすぐとその方向を見た。

「ちょっと暇だから散歩に行つてくれる」

「暇なら片づけしたほうがいいんじゃないのかい？」

「こやちゅう空氣読んでくれないー!？」

そういうとすぐに走り出し、神社へ向かつた。

第4話 後悔先に立たず（後書き）

しつこじょうですがまだ続きます。

たぶん1話は次で終わりです。

5つに区切ることになりましたが感想よろしくお願いします。

第5話 田舎の驛はせたらぬがりやすい

村長に言われたとおりそこには神社があつた。
こんな小島にしては大きいものだ。

そんなに距離があつたわけではないのだが、ここまでくるだけでもうだいぶ日も傾ってきた。

「おーい

誰かいるかー？」

誰かというかキョウを探しているのだが、怒鳴った手前直接呼ぶほどの勇気はなかつた。

呼んでからしばらくして、境内の扉がガラッと開いた。
しかし、そこから出てきたのはキョウではなかつた。

「なにかようかしら？」

そこから出てきたのは、二十歳前後の女性だった。

黒い長髪で、赤い袴。

まさに巫女さんだつた。

色は白く美人だったが、見える限り手首と首に包帯がまかれていった。

「あ、ああ

薄茶の髪のガキを探してんだが知らねえか？」

「キョウのことかしら？」

さつきまでいたけどもひ帰つたと思つわ」

巫女さんは眠そうな目をこすりながら続けた。

「そういえば、誰かに謝りかたを教えてつて言つてきたわ
よくわかんなかったけど、自分に同じことしてもうれば許してくれ
るかもって言ったわ」

「よくわかんないなら適当なこと言つなよ。」

「だつて関係ないもの」

「ふああとあぐびをして言い返した。

その姿からはやる気も何も感じられない。

「そいつど」いつたか知らないか?」

「ハア、いちこちうるそこわね」虫野郎が
・・・あお」めんなれこ、口が滑つたわ」

「おい、今の『口が滑つた』で止付けられるレベルはるかに超えて
んぞ」

「謝りにいったと思うナゾ

ピンクつて人この島にいたつけ?」

「無視すんな!!

なんなんだ、この島はバカしか住んでねーのか!..!」

「とひうで私もう寝たいんだけどいいかじりへ。」

「チツ、時間取らせて悪かつたな」

こいつとは話しても無駄だと直感するとすぐ口に諦めた。

桃色が後ろを向いて走り出すと、もう一度あぐびをして巫女さんは境内の扉を閉めた。

桃色が家に帰ると、そこには誰もいなかつた。

散乱していた物は桃色が入つていたダンボールに片付けられており、そのダンボールの上にチョコレートと村長の書置きがあつた。書置きには「キョウと仲直りしたら食べててくれたまえ」と書いてあつた。

「？裏にも何か書かれてんな」

確かに裏にも書かれていた。

そこには「なにかあつたらいつでも頼つてくれたまえ、私ならいつでも力になる」とかかれていた。

「なにこの微妙な優しさ？」

なんか気持ち悪！」

読み終わる前に紙をその場に叩きつけた。

「うおつ……」

「誰探してんの？」

「くわ・・・

あいつどこの行きやがつたんだ

いつのまにかチョコレートを食べていたキョウが話しかけていた。

「お前にいつからいたんだ！？」

「ピンクが帰つてくる少し前だよ
だいぶ暗くなつてきたからわざと謝つて帰るのしたら、いなか
つたんだもん」

言いながらもチョコレートを口く運びもはほとんどなくなつていた。
横から桃色も座り込んでチョコレートへ手を出した。

「それでね

縁のあねーちやんにあこたりおなじいふをわせねひへむ」

「縁つてあの巫女か・・・」

桃色はわざの包帯の巫女さんの姿を思い浮かべた。
ゴリ虫野郎の影響でいまだ思い出すとイライラした。

「なんだか見られたら嫌なものみたいだつたから
私も見られて嫌なものを見せるよ」

「いや、別にい・・・」

そこまで言つて桃色は言葉を失つた。

キョウは髪をかきあげ隠れていた左耳を見せていた。

その左耳のまわりは火傷の痕があり、眼球は白く変色していた。

「どうしたんだよそれ・・・」

「あの写真の理由聞かせてくれたら教えてあげる」

つまらは聞くなどい「う」とだらう。

かきあげていた手を放して髪を元に戻した。

「コレで許してくれる?」

「あー……」

バツの悪わづな顔をして桃色はいう続けた。

「いや昼間のあれは」「ちが謝るべことなんだよ
怒鳴つてすまなかつた」

今日はホッとしたような顔をして、チョコレートを口へ運んだ。

「よかつたあ！
友達とこんな風に気まずくなつたことが無いからどうすればいいか
わかんなかつたの」

「友達い？

まだあつて一日も経つてねーだろ」

桃色が訝しげに眺めつと、ニヤニヤと笑つてキョウウは言ひ返した。

「それでも友達だよ！

かりに今は友達じゃないとしてもそのうち友達になるから同じだよ

！」

「なんだそ……『やあ、仲直りしたようだね……』

桃色が言い終わらないうちに村長が入ってきた。
しかし、土足のままだ。

「いや、靴を脱げ！！

何で当たり前の顔して人の家に、しかも土足で入ってきてんだ！！」

「アメリカでは普通なのさ」

「こゝは日本だ！！

大体おめーも日本人だろ！！」

「えつダンデ『ダンデイーは言つてねえ！！』

「まあそつ突つかるのはやめなよピンク

「ピンクつて呼ぶなつってんだる！！」

「でもみんなピンクつて呼ぶと悪いつよ～」

その瞬間、桃色は口へ運ぼうとしたチョコレートを落とした。

「……おい、じつこり」とだ？

「だつて私がみんなに紹介したもん

新しく引っ越してきたのはピンクつていうお医者さんだつて…」

「ふざけんなああああ…」

間髪いれず、桃色が叫んだ。

そのせいでチョコレートが入っていた器がひっくり返った。

「ああ！」

食べ物は大事にしないとダメだよ」

「まつたくだ

世の中にはチョコレートを食べられない貧しい子供達もいるのだよ
分かってるのかい？」

散らばったチョコレートを拾いながら村長が言つた。

「お母さんかてめーは…！」

大体でめえもピンクって呼ぶんじゃねえよ…！」

「もう手遅れだけどね

みんなピンクって認識してるよ」

「これからも島のみんなと仲良くしてくれるたまえピンク

「ピンクって呼ぶな…！」

「火人島くよ、火人島…！」

「！」のタイミングで言つたあああああああ…！」

桃色の声が夕日の染める島に響いた。

こつして桃色春太郎の新しい生活の一日目が終わった。

第5話 田舎の夢はやたらとがつやすこ（後書き）

いじりもでが1話にまとめる予定でした。

感想を入れてくれると嬉しいです。

予想よりはるかに長くなりました。

次の更新は来週辺りになると思います。

次から人物設定をここに入れていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

第6話 新生活つてなんかあこがれる

「やつと片付いたな・・・」

収集所に「リリ」を置きながら桃色がつぶやいた。

昨日はキョウとの喧嘩のためほとんど片づけが進んでおらず、この日一日かけて片付けたのだった。

一日といつても大きな家財道具はあまり持つていなかつたので、荷物の運び込みは午前中に終わった。

午後はほとんど村長の持ってきた花やらシャンデリアなどの処理に使つていた。

「これで向とか生活できるな

「おかえり!」

帰つて玄関の扉をがらりと開けると、奥から子供の声がした。

奥の部屋に行くとキョウが桃色の漫画を読みながらソファに寝転んでいた。

土足で。

「色々言つたことはあるが、まず靴を脱げーー!」

「アメリカだと普通だよ?」

「ここは日本だ!!

そのネタ前の話でもやつたるーー!」

はこはこ、とゆつべつと立ち上がり漫画をその場において玄関に向

かつて小走りで向かつていった。

「家中で靴履くなよ」

「大丈夫だつて
あの靴ちゃんと洗つてきたし
そこでシムラの糞踏んだけど」

「最悪じゃねーか、なにが大丈夫なんだよーー
お前の頭が大丈夫か！？」

つーか最初から土足で入る氣だったのかよーー！」

「まあまあ、
チョコレート一緒に食べよ」

そういうて出したのは20㌢ほどある長いチョコレートの棒だつた。

側面に『チョコレート金属バット』と書かれている。

「なんだこのパクリ
どのへんが金属？」

だされたチョコレートをかじりながら言った。

「時々、鉄が入つてゐる
釘とか」

「駄菓子に入れていいモンじゃねーぞそれ」

一人の食べたチョコレート金属バットには幸い何も入つておらず、普通に

完食できた。

「で、おまえは何しに来たんだよ？」

「ゴミを捨てながら桃色が聞くと、キョウは手についたチョコレートを舐めながら答えた。

「うん、村長がコレ渡してきてったわ」

そういうて取り出したのは一枚の白い封筒だった。
ところどころバラのプリントがされており村長らしいものだ。
桃色は中から一枚の手紙を取り出すと何の躊躇もなくその封筒をまるめてゴミ箱に投げ込んだ。

「なんだコレ？」

その手紙は歓迎会への案内状だった。
村長の住んでいる海の家でするらしい。
その便箋には下のほうにバラだけでなく村長の顔までプリントされていた。
読み終わると桃色はその手紙をためらいなく破り捨てた。
破ると同時にキョウのほうを向いて言った。

「行かないって伝えてくれ

「何でー？」

目を丸くしてキョウが大声を上げた。

「私も少し思つてたけどそんなにこの手紙が不快だった！？」

「いや、それもあるけどさ・・・
つーかお前も思つてたんだな」

桃色は少し嫌そうな表情で横を向いた。

「確かに誰にも会いたくないって言つてたけど歓迎会ぐらこ顔出してよ！」

この島の人はみんないい人だからさー。」

「・・・・・・」

桃色がすこし黙つて考へると、キヨウが背筋を伸ばしてこう続けた。

「分かつた、
もつとかわいいあだな考へてみんなに伝えるよ」

「はっ！？」

がたんと一気に立ち上がりながら桃色が怒鳴つた。

「ふざけるクソガキ！」

「春ちゃんは？」

「いやだつつてんだろーー！」

「リボンちゃんなんてどいつ？」

「俺の名前の原型ゼロじゅねーかーー！」

「ねじさん」

「一十代だ！」

「じゃあバカで」

「もうただの悪口じゃねーか！！」

こんなやり取りがしばらく続き、結局桃色のほうが折れた。ちなみにこの後キョウが出したのはすべて単なる悪口だった。

「わかったよ！..」

行けばいいんだろ？がくそったれ！..！」

「オッケー、じゃあ行こうか！」

そういうと、キョウは走つて玄関からでつてしまいそれを追いかけるように桃色も走つていった。
もうだいぶ薄暗くなつてあり、月が空に見えてくる。

「あつ今日は満月だよ..」

「じらねーよ..」

一人の声が何もない島に響いた。

第6話 新生活つてなんかあこがれる（後書き）

予告どおり今回から人物設定を入れていこうと思います。

桃色春太郎（28）

身長／180cm

好きなもの

小説・漫画等

力レーライズ

嫌いなもの

自分の名前

備考

主人公

基本的に素直になれないひねくれもの
悪態をついたあと勝手に自己嫌悪に陥ることがよくある
職業はキヨウというとおり医者だがすでに辞めて火人島に来た
見た目はぼさぼさの髪で田つきが悪い不良

前回からしばらく時間が空いてすいませんでした。
更新は基本的に土日になると思います。

第7話 戦隊ヒーローはいつも5人がかり

今時刻は午後7時。
あたりはだいぶ暗くなっていたが、海の家の周りはいつも以上にぎやかだった。

「思ったより人が多いな・・・」

桃色とキヨウが海の家につくとそこには100人程度の人気が集まつていた。

浜辺にはいくつもの机が並べられそこに料理が置かれている。
みんな飲んだり騒いだりで一人が着いたことには気づいていないようだった。

少し離れたところに立っているとキヨウが村長を連れてきた。

「やあ、ピンク君
楽しんでるかい？」

「いや今来たばっかだし、楽しむ気もねーし」

ぶつきらぼうに言い放つと、横を向いてしまった。

「つーかあの手紙は何なんだよ
不愉快きわまりなかつたんだけど」

「私の手作りだよ
気に入ってくれたかい？」

「人の話を聞いてる？」

不愉快つつただろ「

まあ楽しんでくれたまえ、といつと村長はまた海の家の中へ戻つて
いった。

「あらあなたは・・・」

村長の姿が見えなくなつたとたんにまた話しかけられた。
声のしたほうを見ると昨日であった包帯の巫女さんだつた。
手に「首狩り」とかかれた日本酒の一升瓶を持っており、頬が赤くなつてゐる。
びりゅう酔つてゐるよつだつた。

「あなたがピンクつて医者だつたのね
田つきとか悪いからどつかのチンピラかと思つてたわ」

「相変わらず失礼だなおい
あとペンクじやねえよ」

「縁姉ちやん」んばんわ!」

巫女さんは手に持つてゐる日本酒のビンをぐいっとカツパ飲みした。
口からあふれた酒を手で拭つとまた話し出した。

「私は南野縁

まあ縁つて呼んでくれていいわ

「ああそつか・・・」

縁はビンを下に向け振つてゐる。

もうなくなつたらしい。

近くにあつた机から新しい酒を取るとそれをあけてまたラッパ飲みし始めた。

「お前酒はもつぱりもつぱりしたほうがいいぞ」

「あげないわよ

そこにあるから勝手にとつてくれば?..」

「欲しいわけじゃねーよ

医者としての忠告だ」

桃色が縁の手からビンをひつたくりながら言った。

実際、これ以上飲むと明日一日酔いじや済まなくなるほど飲んでいた。が、その瞬間だった。

「うわあああああん!..」

「!..?」

縁から酒を取り上げた瞬間大声を上げて泣き始めた。

その姿はあるで子供でさつきまでの無表情な巫女さんの影は何もなかつた。

「ピンクがお酒とつたあああ!..」

「えつちょつ、何だコイツ!..」

予想だにしない行動に桃色が困惑する。

あまりに大きな声のため周りの人の視線が集まつた。
縁はそれでも泣き止まずさらに大声を張り上げる。

桃色は横にいたキョウに向かつて声を上げた。

「おい何なんだコイツは！？」

「縁姉ちゃんはお酒が大好きだからね
取り上げるものすぐ泣くよ」

「それ人としてまずくなーか！？」

確かに周りの人の視線も一瞬集めたがもうそれぞれ談笑している。
いつものことなのだろう。

「かえしてよお！！」

思わず桃色は縁の手にビンをもう一度握らせた。
すると嘘のようにすつと泣き止んだ。

「ええええーー？」

「なによその日は」

縁は無表情に戻っているが、涙のあとが頬をつたつている。
泣きまねだったといふことはないだろ？。

「ハーハツハツハーー！」

縁が泣き止むのと同時にぐらいだつた。
どこか不愉快な高笑いが聞こえた。

聞こえるほうを向くとそこには海の家の屋根の上であつ、そこに一人真っ赤な服装の男が立っていた。

「女性を泣かせる外道め！！」

そんなやつはこのビートレッドが倒してやるーー。」

「帰れ」

「一文字でかえされた！？」

桃色はあからさまに嫌そつた顔をして言った。
こいつが何なのかは分からないがこいつがきたらめんじくさい事になるのは確定だつた。

が、そんなことはまったく関係ないといわんばかりに赤い男はひとつ、と屋根を飛び降りると砂浜に着地しこちらに走ってきた。

「で、なんだてめーは？」

「俺か？」

俺の名は火人戦隊隊長ビートレッド。
この島の平和を守るものさー。」

「こやモーサーのはいから
本名は？」

「俺の名は青野銀一だーー。」

「青と銀じゃねーか！」

「だからレッドが出てきたんだーー。」

いらっしゃったように桃色がツツこんだ。

「相変わらず馬鹿みたいな」としてゐるわね

縁が酒をぐいっと飲みながら言った。

「縁！

俺が来たからにはもう大丈夫だ！！
さあ早く逃げろ！！」

ぱつとヒーローのような格好をして縁に言うが、当の本人は酒を飲み続けておりまったくきいていなかつた。

「おこキョウなんだ！」つ

「お前じゃ誰だ！」

「お前は黙つてや」

隣から声をはさんできた青野を黙らせてキョウに聞いた。

「！」の人は島の駐在さんだよ

「はー？」

この小学生みたいのがか！？」

桃色は目を丸くして驚いた。

たしかによく見ると青野が着ている赤い服は警察官の制服にござる。

とこうか制服を赤く染めていた。

「警察もなんでこんなの雇つたんだよ
警察も人材不足なのか？」

「で、お前は誰だ！」

「この人はピンクだよ

桃色のかわりにキョウウが答えた。

なにい、と少し考えてからこう続けた。

「なるほどおまえがピンクだつたのか
ぜひ火人戦隊ビビトレンジャーに入つてくれーー！」

「入るわけねーだろーー！

なんだそのひねりのねえ名前ーー！
どうせてめーしかいねーんだろ」

「大丈夫！

ちゃんと俺を含めて三人いるんだ！
ブラウンとパー・ブルがな！」

「なんでそのマイナーな色をチヨイス?
ほかにも選択のしようがあつただろ」

「ほかがメジャーな色なら俺が目立たないだろーー！」

「最低なヒーローだなーー！」

それでも入つてくれと食い下がる青野を放つて食事の会場へ向かっ

た。

縁は青野を誘つて一緒に飲みに行こうとしていた。

「なんだこの島
変人ばつかじやねーか

この島は変人しか生まれねーのか?」

「はは、でもこの島出身の人は村長しかいないんだよ?」

「やうなのか?」

キョウの言葉に桃色が驚いた表情を見せた。

「うんっ、この島に住んでいる人はみんなピンクと同じで違うところから引っ越してきた人ばかりだよ
いろいろいやな思い出のある人が多いみたい
ピンクも同じじゃないかな」

この言葉を聞いてもう一度周りの人を見渡してみた。
さつきのただにぎやかな感じとはまた違つて見えた気がした。

「どうしたの?」

「いやなんでも・・・」

桃色はゆっくりと息を吸い込んでこう続けた。

「誰ともかかわりたくねーって言つたけど・・・
もつかよつと仲良くしてみようかな」

「それがいいよ。」

キヨウがこいつと笑うと海の家を指差した。

「ほり村長達が何かするみたいだよ。」

そこは確かに人だかりができている。

人垣の奥をのぞいてみると・・・村長と青野が全裸で踊っていた。人だかりから桃色が出てくるとキヨウが話しかけていた。

「みんなと仲良くしてね！」

桃色はこいつに笑つていった。

「無理」

桃色はゆっくりと息をはいてその場に座り込んだ。

この島の奴らの和解することは永遠にないと改めて思つた歓迎会だった。

第7話 戦隊ヒーローはいつも5人がかり（後書き）

鎧塚叶 (7)

身長／117cm

好きなもの

チョコレート

絵画

嫌いなもの

苦い味

備考

島に住んでる女の子

空気が読めない設定だけどよく考えたらこの島の連中全員空気読め
ないな

左目はひどい火傷の痕があり失明している

薄茶色の髪で後ろ髪は背中まであり、前髪を伸ばして左目を隠して
いる。

今回の話は登場人物紹介も含めるつもりでしたが、結局一人しか説
明できなかつたですね。

とくに縁は包帯の理由まで言いたかつたんですけどね。
あと分かりにくいですけど縁じやなくで縁みどりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7423o/>

ドクター・ピンク

2010年11月14日17時59分発行